人を殺してはなぜいけないのか

町田宗鳳　まちだ・そうほう
東京外国語大学教授

特定の宗教を信仰していなくとも、あるいは何らかの道徳教育を受けた経験がなくとも、おおよその人間は漠然と、他の人間を殺してはいけないと思っている。精神に何らかの異常を来たしている者は例外として、平然として人の命を奪える人間はいない。

そこに人間なら誰しもが持っている生命への共感と、最も基本的な良心がある。「人を殺してはなぜいけないのか」。こういう問いかけを自らに課さなくてはならないこと自体、ふつうではない。生きとし生けるものが、生き生きとして生きている社会では、人間の意識に上ってこない疑問である。

かつて首狩りの風習をもつ先住民が存在したが、彼らの共同体では青年が一人前の成人と認めてもらうためには、自分たちの共同体には属さない外部の、それもできるだけ屈強な男性の首を掻き切って、村に持ち帰って来なくてはならないという掟があった。

今もボルネオあたりの集落に入ると、かつての風習の名残か、天井の上に首級がぶら下がっていたりする。旺盛な生命力をもっていた人物の首が放つ霊的エネルギーが、さまざまな福運を村にもたらしてくれると信じられてきたからだ。

しかし、首狩り族とまで呼ばれた彼らとて、殺人という行為には格別の勇気と決断力が必要だったからこそ、少年が大人の仲間入りをするイニシエーション（通過儀礼）の

必須条件として選択したのにちがいない。しかも彼らは、宗教儀礼としてどうしてもそれが必要なときに、一人の男性をターゲットとしたのであり、近代戦争のように無秩序かつ大量に人間を殺害することはなかったのである。

自分に跳ね返ってくる破壊的エネルギー

それにしても、人間は人間を殺してはいけない、ということを知りつつも、人間は人間を飽くことなく殺し合ってきた。歴史上のいくつかの事件では、人間は他の何百万という人間を殺めることもやってのけた。動物でも獲物や雌の奪い合いで、互いに殺しあうことがあるが、敵対する一頭しか相手にしない。それも種の保存のための本能的な闘争であり、相手に対して憎悪を抱いているわけではない。

必要でもない闘争を繰り返し、必要以上の数の同種族を襲い、その息の根を止めないことには、気が済まないのは人間だけである。みずからを「万物の霊長」と名乗り得るほど、人間が動物よりも高等だと言えるのかどうか、甚だ疑わしい。

むしろ文明が進化すればするほど、人間はさらに大量の人間の命を奪い始めたというのが、まぎれもない事実である。万一、核兵器の製造を廃止することがあっても、きっと人類は次なる大量破壊兵器を考え出すにちがいない。その愚かさを直視すれば、果たして文明が進化しているのか、退化しているのか、わからなくなってしまうぐらいだ。

地球上で最も繁栄し、最も大きな影響力をもつ超大国アメリカが、その強大な軍事力にものをいわせて、殺戮した人間の数は、人類史上最大規模であるにちがいない。歴史的に大国とみなされるかどうかは、その国が殺戮した人間の数によって、決まるといっても過言ではない。その例証をするというなら、中国歴代の王朝、ローマ帝国、モンゴル帝国、大英帝国と枚挙に暇がない。日本も明治維新以来、近代的軍隊を編成し、日清、日露、太平洋戦争と、矢継ぎ早に戦地におもむき、積極的に人間を殺したから、先進国の仲間入りができたのかもしれない。

建前を語るなら、他者に銃口を向ける資格がある人間は、この地上に誰一人としていない。とくに銃というのは、自分の身を安全な場所に置きながら、標的となる無防備な人間を一方的に殺傷するだけの破壊力をもっている。考えてみれば、げに恐ろしいことである。

銃の中でも最も進化した形の一つであるマシンガンが頻繁に登場するハリウッド映画では、瞬時に何百発という弾

丸を発する銃口の先で、多くの人があたかも射的場の人形のようにバタバタと倒れていく。そのようなシーンに、自分と敵対する者は全否定するという思想構造が埋め込まれていることを自覚しているアメリカ人は、意外と少ない。殺戮の映像がサブリミナル効果となって、人間の深層心理に浸透していくことは避けがたく、現にアメリカの高校では乱射事件が絶えることがない。

かつてアメリカは、自然と共存する文化の中で暮らしていた先住民をライフルで駆逐し、インドシナの肥沃な大地を耕していたベトナム人を絨毯爆撃し、現在は中東のムスリムにミサイル攻撃をしている。その歴史を振り返れば、アメリカはつねに他者の生活空間に踏み入り、彼らを「正義」の名のもとに駆逐してきた。

強がりをいう人間が内なる弱さを隠しているように、アメリカという国も、異なった価値観をもつ人間の逆襲を受けるかもしれないという恐怖心を拭い切れないでいる。自らの深層心理に巣食う「影」を見極めないかぎり、今をときめく超大国も他者に力ずくで押さえ込まれる運命から逃れられないだろう。

なぜ人を殺してはいけないのか、その理由もそこにある。人を殺すという破壊的エネルギーは、早晩、必ず自分に跳ね返ってくる。人を殺したつもりでいても、じつはほかならぬ自分自身を殺しているのである。

人間の最終的な学習事項

生物学的にも、地球上の全生物はアメーバから発生し、全人類はアフリカの一女性「イブ」を共通の先祖としてもつことが、明らかになっている。だから、〈いのち〉はひとつであるというのは、単に思想的な見解ではなく、科学的に実証されている事実なのだ。他者を殺めるということは、自らの〈いのち〉を傷つけることにほかならない。

仏教の唯識学に「業異熟」という考え方があるが、それは異なった時間の長さを経て、さまざまな因縁が熟してくることを意味する。つまり、自分から発したエネルギーは、いつか必ず戻ってくることになる。そういうふうに考えれば、この世の出来事は、科学的といえるほど、合理的にできている。物理学でいう作用反作用の法則が、どこにも働いている。

他者を殺さないまでも、他者を誹謗するだけで、十分にその否定的エネルギーは、ブーメランのように舞い戻り、自分自身を苛みはじめるだろう。われわれは今日という一日を生きて、他者に対して否定的な言説を発していない

か、大いに反省を要する。

それでも、人間はときに人間を殺めてしまうという悲しい運命を背負っている。善良な市民を装っているわれわれとて、悪意に満ちた人間に遭遇し、理不尽な状況に追い込まれるようなことがあれば、発作的にそのような行為に出ないという保証はない。

あるいは、そんな敵愾心に満ちていなくても、殺人を犯すことがある。しばしば最近のニュースにも流されるように、介護疲れが原因となって、それまで労苦を惜しまず世話をしてきたはずの、最も敬愛する人間をみずからの手で殺めてしまうということもあるからだ。ベッドに横たわったまま、意識もおぼろげな家人をこのまま生きながらえさせるよりも、みずからもまた病に伏せる前に、穏やかにあの世に送り込みたいという気持ちになっても不思議ではない。むしろ情が深い人ほど、そのような思いにとらわれるだろう。

それでも、人は人を殺してはいけないのか。少なくとも言えることは、殺したいほど憎らしい、あるいは愛おしい人間を殺さず、その人物を赦し、愛し続けることは、殺すことよりも困難である。

人を殺すということは、たまたまこの世に生命を授かった自分に課せられている最終的な学習事項を放棄することである。その学習事項が何かといえば、赦しと愛の感情である。その単純な課題を学習しないまま、この世の生を終える人も多い。仏教でいう輪廻転生とは、その課題を習得するまで、何度もこの世に送り込まれるという理論である。

そのような仏教的発想を受け入れるかどうかは別として、「人を赦し、人を愛す」ということは、人間が努力によって獲得できる感情のうちで、最も美しい姿ではなかろうか。「人を憎み、人を殺す」という感情に自分の心を支配されるか、あるいは「人を赦し、人を愛す」という感情で自分の心を溢れさせるか、同じ人生を生きていても、その内容はまったく異なってくる。

「解体業者」を望む

もっとも現代の若者は、他者を憎むという感情すら持たずに、簡単に人間を殺めてしまう。これはどちらかといえば、現代日本特有の現象といってよい。生きているという感覚を失った若者が、それを痛みという形で確認するためにリストカットをすることがあるが、それが他者に向かった場合、殺人となる。

サカキバラ少年以来、次々と起きた少年犯罪と密接な関連をもっているのが、中高年層による自殺の急増である。いつの時代においても、人間は絶望を繰り返してきたのだが、現代のように、あまりにも容易にみずからの命を絶つということは、やはり異常である。多発する若年層による凶悪犯罪と、急増する中高年の自殺は、生命感覚がすっかり鈍ってしまった現代日本人が、当然帰着せざるを得ない運命共同体としての悲劇なのである。

したがって、教育現場に起きているさまざまな問題は、現代日本人がいつまでも自覚することのない生物学的な危機に警鐘を鳴らしている。やや抽象的な表現になるが、私はかねてから、戦後日本の教育は、若者の柔らかな細胞を開放するのではなく、反対にそれを閉ざしてしまう教育であると思っている。

彼らの生来の思考能力や感受性を否定し、一定の型に嵌めようとする意図が強く出すぎている。知識と呼ぶにも値しない大量の情報を詰め込む一方で、彼らの若々しい生命力を奪い取ってしまっている。教育現場の荒廃から日本の将来を憂える声は、よく耳にするが、実際にその改革は遅々として進まない。

人間の生命は破壊してはいけないが、既存の社会制度はときどき破壊しなくてはいけない。でなければ、社会の新陳代謝が止まってしまうのである。ひとつの制度が成立したとき、それは有機的な性格をもち、刻々と変化する社会状況に応じて、外部の要素を取り込みながら、変容していく柔軟性をもっている。

いわば制度にも発酵力というものがあるのだが、長く一定の制度が維持されると発酵力を失う。そのひとつが、日本の教育制度である。この死に体の制度の中で、教育を受けた若者の中で、異常に感受性の鋭い人間が、本能を暴発させ、反社会的な行為に走ってしまうのである。

人を殺した若者は、許しがたい加害者でありながら、じつは究極的な被害者でもある。その責任をわれわれが取ろうとしないまま、彼らを裁き、彼らの更生を図ったとしても、この社会は次々と同じような行動に走る若者を生み出すだろう。

閉塞した社会状況を打破するために、歴史はときどき「解体業者」を生み出すというのが、私の持論である。織田信長は狂える暴君でもあったが、彼が政治的にも財政的にも強大な影響力をもっていた当時の仏教教団を容赦なく解体してくれていなければ、中世はあと二百年ほど長引き、日本列島はいずれ欧米列強の植民地主義の餌食になっ

ていたにちがいない。

私が待望するのは、日本教育の「解体業者」である。従来の教育の延長線上にいくら改良を加えても、解決することができないほど、病巣は深い。もちろん、国家主義や軍国主義に向けて、国民を扇動するような教育界のデマゴーグが出現しては困る。

幕末に特定の英雄はいなかったが、侍と名乗るのさえ憚るような地方の下級武士たちが、同じ志を共有していることを確認した。そして、ともに動いたからこそ、三百年も続いた古い制度から新しい制度への脱皮を可能ならしめたのである。一人の人間ではなく、複数の志ある教育者が力を合わせて、実験的で冒険心に満ちた教育を一刻も早く始めてほしい。

人を殺したくても殺せない。自分とはまったく異質な人間をも包みこんでいける度量の大きな人間を、一人でも多く生み出すことが、教育の最終目的ではなかったのか。ずいぶん的外れの議論になってしまったが、「教育こそが、共同体がもち得る最も崇高な希望である」というのが、「人を殺してはなぜいけないのか」という設問に対する私なりの、素朴な回答である。